

1-2-9a近代

ここでは、「近代」についてお話しします。

「近代」ヨーロッパについては、「時代区分」の章で取り上げているので、こちらでは、《豊かさ》を手に入れることで、人間や自然の関係がどうなるのか、考えていきましょう。

① 《貧しさ》

貧しいとは、生活するための物がなかなか足りていない、ということです。

だから、人々はわずかな物を分け合い、助け合いながら生きていきました。

仲間はずれにすることを「村八分」といいますが、村人が生きていくために、村の和を乱す者はそうするしかなかったわけです。

《貧しさ》のなかでは「伝統」が大切にされます。

それはどうしてでしょうか。

人々は、《貧しさ》のなかでも、いや貧しいからこそ、さまざまな生き抜くための努力をしてきたことでしょう。

しかし、そうした努力がなかなか報われない状況こそ《貧しさ》というのであり、そこでの不用意な失敗は死も意味します。

現代の「貧困」問題でも、「貧困」を抜け出せないのは、その人の努力が足りないからだ、といわれることがあります。

しかし、新しいことに気楽にチャレンジできるのは、まずその元手があること、そして、もし失敗してもどうにかなる余裕があるときです。

そうした余裕がない人は、失敗を恐れて、こうやればいい、これまで言われてきたとおりのことをやることになります。

それが伝統と呼ばれるものです。

伝統は、昔ながらのただの教えではありません。

《貧しさ》を実際に生き抜いてきた人々の経験や知恵です。

だから、こうした知識や知恵を持つお年寄りが尊重されます。

ところで、グラミン銀行って聞いたことがありますか。

貧しい人たちを対象に、小額の融資を行うバングラデシュの銀行です。

創始者のムハマド・ユヌスが74年に42家族に総額27ドル貸したことから始まった試みです。

1ドル150円で計算しても、1家族あたり100円です。

そのわずかなお金が、《貧しさ》から抜け出すきっかけになりうるのです。

逆にいうと、その100円をもたない人たちに対して、チャレンジ精神がないと非難できるでしょうか。

ちなみに、グラミン銀行は、2006年にノーベル平和賞を取りました。

② 《豊かさ》

i) 自由→進歩→進歩史観

貧しいからこそ、人々は、他の人や物と深くつながっていました。
が、それは、周りの人間や物との関係性に囚われている、ということでもあります。

《豊かさ》は、こうした柵（しがらみ）から人々を解放します。

簡単な話です。

もし、消しゴムを1個しかもっていなかつたら、その消しゴムを大事に使うしかない。
なくしてしまったときのために、隣の人との関係も大事にしないといけません。
でも、消しゴムを何個ももっていたら、1個1個の扱いは雑でかまわない。
隣の人に借りる必要もないでの、お隣との人間関係は、その分どうでもよくなります。
物がたくさんあると、物の扱いも人間関係も適当でいい。

《豊かさ》は、人々を「自由」にするのです。

だから、伝統からも自由になりました。

これまでのやり方を否定することで、より新しいことにチャレンジし、より豊かになつていきました。

《豊かさ》は好循環を生み出します。

新しいことをやる元手がある。

だから、新しいチャレンジができる。

もし失敗してもやり直せる余裕がある。

成功すれば、より豊かになった成功体験が次のチャレンジを促す。

こうしたチャレンジ精神こそ**主体性**と呼ばれるものであり、人間は主体性をもつてゐるからこそ、進歩し続けていると考えられるようになりました。

これを**進歩史観**といいます。

この「進歩」を「成長」と読み替えたものが**資本主義**です。

ii) 若さ→記号性

いつの時代も、肉体的な衰えとしての「老い」はいやなものでしょう。

しかし、年をとるということは経験を重ね、生き抜く知恵を磨くということです。

《貧しさ》のなかでは、「若さ」はそうした経験や知恵を持たない未熟さでしかありませんでした。

ところが、《豊かさ》はより新しいことにチャレンジすることで生まれますので、《豊かさ》のなかでは、古いものは嫌われ、より新しいものが好まれます。

《貧しさ》のなかではお年寄りの知恵が尊重されていましたが、《豊かさ》のなかでは若いことが価値をもつようになりました。

たしかに、深夜のテレビCMでよく見かけるのは、女性向けの化粧品やサプリメント、男性向けの増毛剤、、、

「若さ」、いや「若く見えること」をめざしたものばかり。

現代の「若さ」は、「見た目」勝負のようです。

シミソバカスがないこと、髪の毛がたくさんあること——それが「若さ」の記号なのでしょう。

昔から、第一印象が大事、といわれてきました。

人間関係が希薄な現代は、その人物の内面ではなく外面で判断するしかないのかもしれません。

が、若く見えることがその人の価値を決めてしまうような風潮はどうか、と思うのは年寄りのひがみというものでしょうか。